佛教の意義

乾政彦 三著

524
487

始

帝國圖書館藏

佛教の意義

大正
15. 10. 23
内交

524-487

序說

爲政秃山述

本冊子は各宗教大家の教說を基礎として自力宗と他力宗とを問はず苟も教理に徹底せるものを聚め少しも宗門宗派に拘泥する事なく唯大聖釋迦牟尼佛を中心として佛法本體の眞理に據り經典の主旨を說き精神修集の法を解するを以て目的とせり。

抑も佛法の源は印度に於る釋尊の教を支那に承け支那より我日本に傳へ以て今日に到る事は勿論天台宗に初り眞言宗淨土宗眞宗禪宗日蓮宗の順序にして廣まりたるものなり故に佛法は總て釋尊の說れたる經典五千餘卷を支那に於て飜譯されたるものにして我日本の佛法各宗は元來此の經文に基き各宗門を開きたるものなれば自力宗も他力宗も教の趣意及び結果に於て同一であらねばならぬ。

同じ釋尊の說れたる經文に依て以て他宗を攻擊又は傷け誹り罵るものあり殆んど聽に堪へざらしむるに至ては恰も天に向て唾を吐くが如し我田引水も亦甚しと云ふべし譬へば富士山に登るが如し頂上に到達するを以て目的とせば何れの方面より登るも可なり東より西より或は南より北より登山の道あり信仰の道も何れの宗門に據り進むも目的は同一なりされば宗派宗門の門戸に執着し若くは拘泥するものは遂に目的地たる釋尊の教の眞髓に到達すること能ざるなり其故に各々己の信ずる宗門に入り信仰の大道に進むべし要するに宗門の是非甲乙を論爭する者は徒らに法をして商賣的化し釋尊の教の眞理を攪むこと

を得ざるべし要するに本冊子は各宗説く所の要點を學び載せて以て聊か佛法修養の端緒とせり余淺學菲才素より佛學の素養もなし只先輩諸氏の高説を聽き參考として記述せるに過ぎず從て亦誤りなきを保し難し希くは賢察を乞ふ

釋尊の説れたる佛敎は實に二千五百年以來無限に擴がり人道敎化の力は亦無限にして平和と光明は永遠に輝きつゝあり吾れ等は寂光淨土の此の樂天地に立つて美しき佛道に向つて進み早く惡夢を破て淸風光月に醒めねばならぬ

○夫れ人間にして宗敎を知らざる者は人に非ず萬物の靈長であつて信仰なき者は則ち禽獸に近し

大凡天地宇宙間にある物は一として眞理に因て出現せざるものなし人間は天地の眞理に據て生れたる者とせば必ず宇宙の天理に背く事を得ず宇宙の天理とは宇宙の本體なり本體は是れ即ち神である

佛と申すなり衆生の體は肉身共に神佛の力に依て世に出現したる者なれば亦宇宙に歸ることは論を俟たず神佛[illegible]ものは苦滅すること理の當然なり

大聖釋迦牟尼佛は今を去る約二千五百年前に於て世を救ひ衆生を援くるの大使命を帶びて印度に降誕せられたのである

釋尊が山に入り色々の艱難を嘗め苦悶と戰ひ有ゆる迫害を退け苦行せられたるは世を救ひ人を助んが爲めである釋尊は偉大なる力を以て然して偉大なる智惠を具備して出現せられたのである無限の力と無限の働きに據り有限なる肉體を透ふして吾々一切の衆生を救ふの使命を以て生れられたのであるから是れ人の形に依て現れたのであつて天地の間は無限なり釋尊の肉體は消へても御生命は無限である貳千五百年後ちの今日燦然として輝いてゐる獨り釋尊のみに限らず我國に於ても聖德太子を初め弘法大師。親鸞上人。傳敎大師。法然上人。道元禪師。日蓮上人。の如き其外多數の偉人開祖は悉く皆な釋尊の衣鉢を繼ぎ世を救ひ人を助んが爲めに出現せられたのであるから皆な佛の化身と云ふてよい吾々と雖も元來佛心を有する身なれば修業して信仰に入り法を説き人を導くに至らば即ち釋尊の身を分

けた一人となるのである

佛の心と自分と相感應して渾身の力を奮て働く時必ず佛性が伸びて行く我々は一切の物と共に生きてゐる

山川草木森羅萬象の總てのものは人と共に生きてゐる愛に依て惠まれ相援け相保ち無限の内に働き全く空しく存在してゐるものはない宇宙の天地にある物は凡て宇宙の力らに惠まれ生き伸びてゐるのである

宇宙を支配するもの則ち統御するものゝ

本體を

一佛法は佛と言ひ

一神道は　神と云ふ

一儒道は　天と稱るのである

神佛の本體

○山の端にゐざよふ雲を離れきて田毎に寫る月を見かな

それは皆な月の影にして月其のものは一體であるが如く佛と名くるものは數多けれど本體として見るべきものは宇宙を支配せらるゝ一體一佛の外にはなゐのである

大自然とは天地宇宙の道理である宇宙は動ゐてゐる宇宙の中にあるものも又悉く生きてゐる

佛の生命が千變萬化の狀態を顯してゐるのが現象界である無始無終の御生命と說いてある

釋尊が宇宙の使命を承けさせられ肉體と成て生れ大修業の際圖らずも御自分の生命は大宇宙大自然の然らしむるものなることを直感あらせられ始て生老病死の眞相を悟られたのである

大自然は實に久遠不滅の生命であり且つ終りなきものである

無始無終の宇宙は無常で凡て無常なり宇宙にある萬物皆な悉く無常なるが故に轉々無常に動いてゐる

故に其の實相は空である諸行無常萬物の實相皆な空で一切是れ空なりと說いてある

宗門

宗門とは法に入るの門戸なり一旦其の門を潛りて佛法の大道に進入せば何宗何派も皆な同一にして更に異る處あるべからず

即ち佛の慈悲心を吾等の本心に寫し自利利他とを並行する事是れ佛法の一般を示す信心なり是れ以外に佛法と稱すべきもの有る可らず若しありとせば皆な便宜假說の敎へに過ぎず百萬の經文も又悉く此に存する所以なり

法華經可なり淨土經可なり阿彌陀經可なり何れも佛法の眞意を解達して其の實行を勤むるにある理を悟り行を正ふする事是れ信仰に入るの門戸なり念佛宜しく題目も南無大師南無釋迦牟尼佛も宜し己れの信ずる宗門を選み之れに歸依して佛の大道に向て進むを以て一心不亂信仰するに若かず

○感謝の生活とは

人は財あるが故に貴からず心に信が無ければならぬ財は素より寶なり然りと雖も心の安定が第一なり愉快なる心は多くの寶よりも勝さる愉快なる生活は貧ふして能く樂みある生活を得るなり

○人は何の爲めに生れたる乎

天地宇宙の作用に依り佛の使命を受け世の爲め人の爲めに活動すべく生れたるなり自分の職業は天の授けである其の職業を勵んでこそ其所に財寶を得る

○人は己れを慎み我慾を去り他人を勞わり常に慈愛の心を以て交らねばならぬ

爭論は相互を傷け害ない遂に相方共に亡ぶるものである家庭に在ても亦然り

○人には各々長所と短所とあり是れは佛の使命にして亦如何ともすべからず業務の自分に適する仕事をするのが最善である短所を捨てゝ長所に據て働かねばならぬ

業とは善業惡業の事にして善を行へば善を生じ惡を施せば惡を生ず是れ則ち宇宙の眞理なり

善根功德を行へば其の德を以て幸福來り且つ長壽なる事當然なり

○慈悲親切の心は幾等人に施しても之れは無盡藏なり財寶則ち物質には限りがあるが慈悲と親切の心は盡る事なし慈悲を施し德を積むを佛と云ふ佛の心とは是なり

○惡業を爲す者は自ら傷つき損ふ惡業の末路は悉く自滅す災難病苦早世等皆な因果應報なり

○疑は迷いなり迷ふ者は信仰なきが故なり迷を去て初で心ろ安らかなり

不安なる心を以て生活する人は苦痛である

感謝の心を以て生活する人は幸福である感謝とは常に己れの業務を樂み喜び心に愉快を感じ佛の加護を感謝するのである

○信仰に入るとは

自己の眞價を知たと云ふ事で有て己れの使命を知り行ふことである

信心獲得。轉迷開悟。安心立命。即得往生とは是れ今日今即時迷わない人と成たのである信仰の意義を解し衷心念願の心に映じ眞の信者と成たのである

佛

迷いのない人
常に樂を持つ人
永劫の生命を信ずる人
自利、利他の人
自覺の人

凡夫

迷いの多い人
煩惱苦痛ある人
有限の生命の人
自損、損他の人
無自覺の人

自己の生命は

佛の御生命にして肉身は佛の借りものなり
阿彌陀如來とは釋迦牟尼佛の化身にして
南無とは賴むなり覺りを得させて頂くことを希ふの意なり
佛とは知なり覺なりと解す
衆生は本來佛生を有す水と氷の如く水を離れて氷なく衆生の外に佛なく
迷ふ人は水の中に居て渴を叫ぶが如し
一切の衆生悉く佛性を有す
凡ての人は自身に尊き佛性を持ちながら寺院や、佛壇の中に佛を探ぬるは恰も背かに負いたる子供を探

すのと同一である佛は我身にあることを知らぬからである
一字を知らずして詩意あるものは詩家の眞趣を得る

自利他損とは

己れのことばかりの利益を考へ他人に損害を與ふるの事なり
利己主義のことなり

家庭の極樂柱とは

一　堪忍の柱
二　正直の柱
三　勉强の柱
四　心切の柱
五　信仰の柱

以上の五柱に傷を附けざれば家庭圓滿にして人道に背かず信仰の道に入ることを得るなり

○極樂はたゞ喜びの國と知れ

○とはれても云れぬ蓮の香りかな

心を正ふして身を修め身修て家齊ふ家齊ふて國修る國修つて天下平かなり

三罪とは

第一　法律上の罪
第二　人道上の罪
第三　心の罪

三眼とは

一　肉眼(見の意)目で見る事
二　心眼(觀の意)心の中で觀る事
三　半眼(瞑の意)一方丈け見へる事
(佛の方よりは見へても凡夫からは見へぬ事)

三つの懺悔とは

一　心の懺悔を云ふ
二　身の懺悔を云ふ
三　口の懺悔を云ふ

信の道に古今なし
罪は宿すべからず
己れが欲せざる所人に施すなかれ

恭敬とは

心で敬まい且つ體でも敬ふ事なり

合掌とは　和合の意

十指を合せて親子兄弟姉妹等相會ふの理なり

十方とは　光明十方を照す

東西南北丑寅辰巳及び天と地と云ふ事なり

佛に背面なし（前後左右なし）
佛には前も後ろ右ぎ左りなし

一佛一体

佛は唯一佛一體あるのみと云ふ事なり

口、心、身の戒め

口は口を守りて惡口を言わぬ事
心は心を收めて正しき心になれ
身は身を犯す事勿れ
佛とは心の結ばれが解ける
則ち佛（ホドケル）の意に通ずるなり

南無とは

求助の意にして助を求むる事（印度の言葉）

阿彌陀とは

阿は無し彌陀とは量るの意にして量りなし無量無限の事なり
安心とは安置の義なり
心の置き所を附けるの意なり

一心とは

眞の心から出るのである
信仰に動と不動の二種あり
○動とは淺き信心の事
○不動とは動かざる事にて修養の出來たる深き信心を云ふなり

助からぬ人とは

第一　疑ある人（猜疑心の深き人）
第二　信仰の續かざる人

第三　高慢心の人（偽り悪口を云ふ）
第四　我慾の人（自利他損の人）

生佛不二

佛も人間も二つならずと云ふ事にして人は皆佛心あり佛有て人在り人有て佛がある則ち生佛不二と云ふなり

二河白道とは　水の川と火の川あり　（おかけじの繪にあり）

一　水の川は貪慾に譬へ

二　火の川は煩惱に譬ふ

白道は二河を渉る眞中の正道なり正しき路にして則ち信仰の道の事なり

煩惱を起せば怒り腹を立てゝ則ち自ら亡ぶのである水の川は右側に在りて狂亂怒濤逆か卷く浪の漲ぎり

火の川は左手にありて猛火熾々として燃へ上りつゝあり後方はあらゆる猛獸の將に來り喰んとす身は進退茲に谷まるの時二河の中央に白道あり向ふの岸には諸菩薩出迎ひありて　速に火水二河の中央なる白道を渉りて來れと呼び賜ふなり此の圖は是れ貪慾の水の川に溺るゝ勿れ煩惱の火の川に陷る勿れ中眞の白道は正道なり即ち正しき路を歩んで佛の仰せに從へと云ふことを圖を以て示されたものなり

貪慾を起せば慾の爲めに溺死するのである

憤怒は既得の財を失ひ

貪慾は未得の財を得ず

人道の正しき道を通れと戒めの譬へである

あんな山こんなおやまとよそみして
踏み迷ふなよ御佛の道

仙崖和尚の曰く

寡レバ欲則チ心ニ自ラ安シ神安ケレバ則チ必ラズ壽ナリ

欲寡ければ則ち心ろ自ら安し神安ければ則ち必らず壽し

寔にそうである餘り慾ばらねば心も自然と氣樂である氣が樂であるから長命するのである

禪の敎へは中々味ふべき所がある左に

○欲なきの欲を去れ

之れは誠に能く穿つた詞である

佐藤一齋の語に善く身を養ふ者は常に病を病なきに治す又善く心を養ふ者は常に欲を欲なきに去る病の

未だ發せざるに先て克く其の病源を治するは養生法の上策である

欲の未だ起らざるに先つて克く其の欲本を制するは養神の上乘なるものであると云ふことなり

○此の一節は禪宗の巨星某が禪の奥義を話されたるものである

禪の第一關は欲本を制するにあり禪は必しも禁欲主義では無い唯泡沫の如き價値のない眼前の欲望に囚はれずして人道の大源に心を澄まし天地自然の神韻を翫味すべきである全く區々たる名利に役せられぬ

自ら高く守るが故に浮雲の如き權勢や富貴に對して何等愛憎執着の念が無い

大名杯が臣妾の諂を喜びて宴樂に耽るを見て恰も小水の魚が暫時の住を得て喜ぶに等しと諷したものである

濟門の巨匠白隱禪師が原の松陰寺にありし時西國の大諸侯某江戸參勤の途次特に白隱禪師を訪ふて垂示を乞ふた時にたま〳〵門前の一老婆來りて黍餅を供した白隱則ち受けて之を侯に進めても何がさて田舍の貧家なる手製にかゝる黍餅侯は之を食するに堪へずして頻りに辭退せしも白隱禪師は强て之を勸めて曰く公願くば之を喫せられよ公の如きは之を見て無味とも思ひ不潔とも思はれんされど田舍の士女はかゝる黍餅を食することは一年に數回に過ず公は宜しく之を食して以て小民の生活狀態を味はゝれよ私の垂示も此の外にはござらぬと云ふて遂に食べさせられたと云ふ事である

元來禪僧は三衣一鉢に甘んじ枯淡なる生活を以て修道の便宜とせり一粒の米一莖の草も皆天地の惠み信施の賜なりと觀じて不足の感を訴るが如きは殆んど罪惡の如くに思ふのである

「貧なれば即ち身常に縷褐を披す道あれば即ち心に無價の珍を藏むを以て修養の箴とせり

必ずしも貧を望むに非らずして貧富を超越したる精神的德財を尊重するのである此の試練あるを以て一山に住し一堂の主たるも猶淡泊なる活計善く一汁一飯以て自ら安んずるのである

越後の良寛禪師が山の半腹に五合庵を構へ嚢中三舛の米爐邊一束の薪に悠々たる禪の天地を打開してゐた當時の句に

○すみなれてこゝも盧山の夜の雨

○焚くほどは風がもてくる落葉かな

一夜賊ありて和尙の大切な布子を盜み去る其の時の句に

○盜人に取りのこされし窓の月　と詠じて怡然たるものであつた

道元禪師が永平寺を越前志比の山中に開創せられた時猿鶴を友とし柿栗を以て食を補ふ狀態であつた禪師が四來の雲水に對して曰く（雲や水に向つて云ふ）

諸子は折角山に梯し海に航して來れるも何等待遇の資がないされど（諸子とは雲と水の事）

溪は乃ち晝聲夜聲運水に落便宜なり

山は又春 色秋色 搬柴に得便宜なり

且つ希くば雲水道を以て念と爲せと示されてある此等は決して奇を好み貧を求めて強て人情に逆行するのでは無く物質の外に超出して天地の大道を樂まれたのである此の見地と風流とがありてこそ其の心境は常に綽々然として餘裕ありて見聞の爲に惑はされず聲色の爲めに瞞せられず能く萬象の主となりて隨時隨所に理想境を開展し得るのである

是れ則ち欲なきの欲を制するの方術である然らざれば眼見耳聞に過またれて或は黄金の奴隷となり或は名利の從僕となり確信もなく理想もなく葬り去るを免れず

禪の敎は斯の如く萬里一條鐵たる理想的生活を營み一心を高所に安住する覺悟がなくてはならぬのであるとの事なり

○四 攝 法（攝とは取り入れる意）

一 布施攝　人に施す事

二 愛語攝　人に優さしき言葉を掛る事

三 利行攝　身の行いを磨く事利は研ぐなり

四 同事攝　同じ樣に人と仕事を共にする事

一、布施と云て財を人に惠む事ばかりに非らず
　親切を施すも矢張布施にして人を憐れみ悲しみ助くる事なり

二、愛語とは笑を以て人を迎へ親切なる言葉を掛て喜ばせ人を慰め援くる事なり

三、利行とは自分の品行を正ふして信仰を以て人を救ひ導びき人の標本となる事

四、同事とは事を同ふするの意にして人と苦樂を共にし人の仕事を援け人を感化せしむる事なり

凡そ敎を擴むるにも法を敎ゆるにも此の四攝法を以てせざる可らず或は一家を治むるにも必要なり人を感化善導するに於ても皆な然り

○維摩經に

紹隆三寶能使不絶

三寶とは佛、法、僧の事なり

金佛木佛畫像のみを申すに非らず吾人が之を實行する事にして夫婦親子兄弟姉妹が平和に暮らす事即ち僧寶なり和合を僧と云ふなり

此の和合平和の範を示すものを佛寶と云ふ即ち佛は其れ自體なり左れば一家圓滿平和なれば佛壇は無く佛像もなく經文は知らずとも一家自體が佛を具へ法を行ふて僧を務むるを以て三寶を具備するものと

なる之れ此の經文の敎なり
此の如くにして一家繁昌子孫長久の實が存在すべし

○以和爲貴

聖德太子の曰はれたる和とは私しのことにして私を去る自分の事を捨てゝ人に交り接すると云ふ事なり
是れ即ち和合平和にして人道の最も尊きものであると云ふ事也

○發心とは

心の信を悟る事にして眞心の發露である

○國家とは

社會なり國である國家社會を益する偉人賢人君子は即ち佛の分身なり故に國家を益し人の爲めに幸を與へ人を援くるのである

○合掌する事は　和合の意にして
十指結合し親子兄弟姉妹を意味するなり

○袈裟は　是れも和合の意を表したるもので大小の裂れを繼ぎ合せ即ち人々の心を和らげ相互に持ち合ひ離れざるの形なり

○理同とは（佛理に同じ）

○事勝とは（實行方法の事にして手に意を結び心に眞言を唱へ佛を迎へるの意なり）

○專修とは　一體の佛を賴み念ずるなり

○娑婆即寂光土

娑婆は即ち寂光淨土である自分の行ひ又心の持ち樣で極樂となり或は地獄となる娑婆以外に極樂地獄の世界なし

○南無とは　又歸命と同一の意なり

信ずる　（感謝の言葉）
愛する　（願ひの言葉）
希望す　（誓ひの言葉）
眞面目に敎を受ける事を誓ふの意なり

○癖のある信心に　二つあり

一、乾燥せる信心

二、腐敗せる信心

乾燥せる信心とは餘り高尚に失し人生と懸け離れたる時

腐敗せる信心とは餘り俗化し過ぎたる時

假令ば病氣平癒の願ひ或は金錢の溜る願ひ等信心に據り或は祈願によつて自由に授かるとか何れも敎の亡びるものである祈禱も誤信迷信に依て亦甚きものあり

○祈　禱

迷信より起る祈禱は害あつて何等の力あるものに非らず

○正しき祈禱は　正しき信念の力に依て神佛の加護援助を受くる妙法と云つてもよい

○修養と信心

修養と云ふものは丁度雜巾がけをする樣のものである毎日同じ所を撫でゝ居るのであるが何日の間にか

底光りが出てくる樣のもので信仰の光りも毎日一心に敎を聞き信仰を勵まねばならぬ而して修養が出來るのである

○深ク識レハ世法ヲ即チ是レ佛法

世間の人情道德を知る者は是れ佛法を知る者なり

○無シ作ニ佛念ヲ作ル人ト亦難シ常ニ住シテ此ニ說ク法ヲ

佛法信念のなきものは人となる事は出來ぬ常に此の意味を以て釋尊は法を說かれたのである

○轉レ重キヲ輕ク受ク

先きに犯したる罪惡の重荷を轉じて輕るき樣に勤めると云ふ意にして有ゆる辛抱艱難を受け信仰の力により己れの罪を打ち消すと云ふ事なり

○十四條の戒

一　憍慢　自慢する事

二　懈怠　なまける事
三　計我　自分の事ばかり利する事
四　淺識　物を半かじりする事
五　著慾　慾に執着する事
六　不解　物に理解せざる事
七　不信　何事も信ぜざる事
八　顰蹙　顔をしかめる事
九　疑惑　疑ひ惑ふ事
十　誹謗　人をそしる事
十一　輕善　何に其の位ひの事と云ふ事
十二　憎善　人の善を憎む事
十三　嫉善　人の善をねたむ事
十四　恨善　人の善きことを恨らむ事
以上十四ケ條にして戒め犯すこと勿れ

○六道

一　地獄界　憤怒の心
二　餓鬼界　貪慾の心
三　畜生界　利己心の强き事
四　修羅界　常に人と言ひ爭ふ事
五　人界　時に依て變心する事
六　天上界　喜びの人
以上六道の敎なり

如來の慈悲は　智なり　道なり　德なり
大なる慈悲
大なる智識
大なる德
釋尊は生者必滅會者常離の敎を說きて父君の臨終に安心立命を與へられた

○大悟徹底

信仰に依り悟りを得た人は今や將に死せんとするに臨んで少しも動せず悠々自若として何等恐れざるの態度あり是れ信仰の爲めに得らるゝ者也

佛法は四海同胞一視同仁を以て主義とするが故に無限の光明に浴し無限の平和と永遠の幸福を得て佛法恩惠の聖地に立ち美しき道を歩まねばならぬ衆生は汚濁と混迷の夢から覺め相互に人を敬し人を救ひ援けねばならぬ

○誤は先方にあると互に力むから喧嘩が起るのである

○他人を責めないで自己の完大なる心を以て念願とすべし斯くて人物は益々大を爲す

○自分の事でさへ思ふ通りにならないのに人が自分の思ふ樣にならぬのは當然の事なり

○人を抱擁する力の大小に依て其の人の信仰の程度が定るものである

○善い種を蒔けば良い實が乘る

種は即ち因となり芽は果となる

即ち善事を行ふ者は子々孫々に至る迄で幸福繁榮を來し且つ幸福なる處に生る

○又惡事を行ふ者は子孫に至る迄で惡しき報を受け不幸なる處に生るゝこと必定なり

因緣因果は到底離るべからず

○火の車作る大工は無けれども己が作りて己が乘りゆく

惡い種を蒔いてはならぬ

○俗に能く釋迦も方便と言ふことを云ふが之れは方便經と云ふ經文を御說きに成て居るので恰も其の經は釋尊が嘘も方便とて全く出鱈目の事を說れてゐるものゝ如く解譯して居る人があるが決してそふではない苟も釋尊にして一言一句たりとも嘘詐りがあろふ筈がない

○方便とは ○正しき ○方さに ○法り ○正確なる法と解し

便とは安らかなり ○從ふ ○習ふ ○即ち安んじて從ふの意なり正しき道を歩んで佛の大道に進めと云ふ敎なり

○善良なる人たらんと欲せば宜しく佛道に入り信仰を奬め勵げみ尊き法の偉大なる力に據て救を願はねばならぬ以て萬物の靈長たる事を得らるゝのである

○座を見て法を說け

緣なき衆生は度し難しと

法を說くにしても緣のないものには幾等說き敎へても分らぬ無駄である又無智にして無學文盲なる者に

は其れ相應した程度のことを敎へざれば決して理解のできるものではない

釋尊は能く座を見て法を說かれた

釋尊の說法は四十五年の久しきに涉り縱橫無盡に莫大なる敎典を說かれてある

第一　華嚴經

第二　阿含經

第三　維摩經

第四　勝鬘經

第五　法華經

第六　涅槃經

佛陀の敎法を

○根本佛敎と云ふ著書に於て左の如く書いてある其の形式から分別すれば

經あり

律あり

論あり

其の思想を言へば

有の思想

空の思想

中道の思想

其の敎を受けた衆生の機根から分類すれば

一、聲聞緣覺の小乘敎あり

二、菩薩の大乘敎あり

修養の方面から見れば

一、自力宗あり

二、他力宗あり

若し夫れ現代の見方よりすれば

○科學あり　○哲學あり　○倫理あり　○宗敎あるが如き次第である

釋尊の敎法第一を華嚴時代として

菩提樹下に在て上乘の菩薩に對して大乘微妙の法門を說かせ給ひしなり華嚴敎八十卷は此の時の說法で

華嚴宗は此の經に依て開かれた宗旨である此の經は金剛座上で悟られた其の儘の最も高尙なる法門敎典

であるからして此の座にある一般愚鈍な無智文盲の小乘の者には何が何やら薩張解らぬ全く啞の如く聾

の如くであつた唯菩薩のみ知ることが出來たのである之れを物に譬ふれば恰も朝日の東天に登るとき四方山の山巓丈けは照らして居ても谷底に到つては光を受けずして猶暗きが如し

高き處の人は解ても低ひ所の人には分らぬ

玆に於て佛法敎化の手段方法が必要となり座を見て法を解かねばならぬ事を直感せられたのである最初に此の如き高尙なる獅子吼をせられたのは佛敎開宗の宣言と併せて座に聚りたる聽衆の深淺を試めし見られ其れより以後敎化の方法を成し給ふ準備であつた

釋尊理想の敎は華嚴經の高尙なる佛敎最高の目的である然しながら一般劣等の文盲なる民衆の者を救ふことが不可能であるから其れ等の一切を救はねば自分の使命でないと云ふことを直ちに悟らせ給ふたそこで第二の阿含經前後數十卷を簡易に優しく如何なる無智無學文盲が聽ても解り易く說かれたのである之れ即ち十二年間遍く上下民衆に向て說き示され

凡て因緣因果の道理に依て萬物悉く存在する

(有)の思想であると共に其の裏面には凡べて因緣に依て出來たものは亦因緣に依て亡ぶ萬物衆緣が和合して出來たものであるから因果當然の歸結として無我である即ち法有我無なりと說かれたのである而して(主我)思想を打破せられたのである右阿含經は小乘敎である

小乘經を說くのは大乘敎を說く爲めの準備として更に進んで大乘敎を說かれた其の間に大小乘の架橋として大小二乘の比較優劣の說敎がある之れを第三時代の說法と云ふ

其の後に

維摩經を說き給ひ約八ヶ年間大小二乘の敎を並べ說き大乘の優れることを悟らし小乘の人をして大乘に進ましむる方法を取られたのである

大乘は廣く人に敎へ人を助け均しく大小の人に被らしむるの謂いである

愈々大乘初門の敎として般若經(六百卷)等を說かせられ之は二十餘年間先きに(法有我無)を說き(般若經)に於ては進んで(我法二空)の道を解かれてある

此の如くにして釋尊が幼稚なる民衆をして數十年間說法し誘導敎化をせられたる功空しからずして彼等愚鈍なる者に至るまで悉く修養が出來漸く熟達したから乃ち(靈鷲山)に登られ約八年間釋尊の本懷たる

法華經を說かれ(解深密經)も亦此の間の說法である後世に到つて

法華經に依て天台宗起り

解深密經に依て法相宗起り

涅槃經に依て涅槃宗が起つたのである

初め華嚴時代に華嚴經に於て說かせられた佛陀の本懷佛敎の理想を再び法華經に依て復飯され衆生が修

養發達したから先きの華嚴經の本懷理想を再三繰り返へし是れ即ち皆な

華嚴○法華○解深密經○涅槃經の四經は其の内容に於て其の價値に於て同一である全く言葉を替ゑて云へば同じ意味を繰り返へされてある此の四つの現はれたる一貫の思想は阿含經に於ては主として

(有)の思想を說き(槃若經)に於ては專ら(空)の思想を述べられてある

乃ち衆生の一切は(有)の思想に執着するものあり亦(空)の思想に囚はるゝものあり釋尊は茲に於て兩方とも執着を打破し

(有)にあらず

(空)にあらず

(中道)なり即ち(實想)なりと說かれてある

大体宗敎的には一切の衆生は皆な成佛の思想であつて悉く本來佛性を有して居るから衆生諸佛不二平等なり左れば其の本性を晦まして居る煩惱を除き去つてしまへば佛性眞如の光は現れて來るそれゆへ信仰が必要である修養がいることになる

○大凡高等なる宗敎ならば何れの宗敎に於ても一致せねばならぬ

佛敎の目的及び理想も亦迷界より覺めて悟界に入り有限なる吾等が無限絕對に這入る道程である

善業を積ば其の結果は天上界に生れ惡業を造れば作る程餓鬼界修羅の巷に漂ふのである麥をまけば麥を生じ米を種ゆれば米が出來るが如く之れ三世の因果業報輪廻の思想と云ふのである

斯くの如くにして吾々人間は迷界に沈淪して更に益々惡業を增進して遂に浮ぶ瀨が無くなるのである茲に至て一旦翻然として佛道に歸依し佛法を信ずれば是れ又因果の法則に依て悟界に入ることが出來從つて安樂の世界に浮ぶことが出來るのである

以上は佛法根本宗敎の第一節として釋尊一代の敎化定義を明らかに示されたること右著書にあり

○磯までは海女も箕着る時雨かな

どうせ海に入る女ゆへ濡れ鼠になることは覺悟はして居ても磯端まで行く間は濡れたくないと云ふのが人情なり

○盤珪禪師の曰く

(君子一日生くれば一日世に利あり)

人間は死ぬと極て居るが生きて居る間はこの身体を大切にして盡すべき勤めを盡くして行かなければならぬ何事か世の爲め人の爲めに盡くして行くと云ふのが人間の勤めである此の一生涯を無駄にせぬと云ふことである

○又澤庵和尙は

「思へば日々の別れかな」
今日の一日は又と遇はれぬ一日であるから無駄にしてはならぬと云ふことなり
信心も一日怠る時は一日遲れ一生取り返へしが出來ぬ

○福運は勤勉の人に隨ふ

福運は實に眼目を具へて居る福運は常に勤勉なる人の側にそうことは恰も順風に帆かけて走る船の如きものである
己れが信の心を堅く持ち精進勇鋭にして畏れず諸々の惡魔を破滅し敎の正道に進めば必らず家内安全子孫繁榮常に寂光淨土に棲息することを得るなり又安樂に此の世を暮すことが出來るのである

○信仰とは

唯神を念じ佛を信ずるばかりを云ふのではない
君に忠親に孝を盡し祖先を大切にし追善供養し先祖を祀ることが信仰第一の要點であることを忘れてはならぬ
只お經を毎日通讀することを覺へたばかりでは論語讀みの論語知らずに終る信仰の意義が徹底すれば只單に念佛を稱へ或はお題目のみでも足る
信者によると無闇矢鱈に寺詣りに日を送りお經を讀むことを以て信仰の要諦とせるものあり彼等は寺を自分共の倶樂部の如く即ち時間潰しの場所とし婦人の如きに至ては互に衣裳の美を衒らひ之を自慢で參るものもある寺に度々足を運ぶを以て信仰を積むものと心得自分の心は上の空で屢々結構な說敎を耳に蛸の出來る程聞ても馬耳東風で反て世間話に耳を傾け或は人の惡口云ひ又は他宗を誹り偶々おとなしく默て居るかと思ふとこつくり〳〵居眠りしているのが落ちである心此處に非らざれば見てみへず聽て聞へず食へども其の味を知らず

○佛敎では

利己主義と己人主義は絕對に大禁物である佛法信者の家庭にして己人主義に或は利己主義に沈溺してゐるものあり此の如き家庭の多くは得て圓滿ではない親爺は常に愚痴を溢し連れ添ふ家内は始終不足を並べ息子は道樂をする從て惰けるそうなれば嫁丈け溫しくして居る道理がない自然と贅澤をする茲に於て各々利己主義を主張し或は己人主義となり家庭の圓滿は六ケ敷なる何の爲めに信仰するのか家庭に在つては毎に修羅場を現じ何せ信仰の力に依て愉快なる圓滿なる生活を味ひ感謝の喜びに充ちた暮しをなさぬのであるか爰が凡夫の淺間敷所以である心の持ち樣で笑もすれば泣きもする
信心の力に依て絕對に利己主義と己人主義は排斥せねばならぬ
己人主義と利己主義が在ては眞實の佛道に入ることを得ず是れは敵であるから撲滅せねばならぬ

徹底したる眞の信仰を得たる人には絶對にない信仰の修養を積み眞現に佛道に入らんと欲せば先づ己れの心から出發せねばならぬ心とは赤心である心底から出る無邪氣なる眞言の心のことなり

○信仰とは

信は眞言なり。違ざるなり。明かなり。僞らざるなり一心に通ずるの意なり。

仰は　敬ひなり。遵るなり。仰ぐなり。

佛の敎を仰ぎ敬ひ信じ守るなり

佛の敎とは釋尊が四十有餘年間說き示されたる戒めなり。行である

敎を聽たばかりでは駄目である身に行はねばならぬ遵らねば何にもならぬ直しき人道を步むのである正道を通るのである

○心だに信の道にかなひなば祈らずとても神やまもらん

自分の本心が信の正しき道を行ふて行くことが出來るならば別段に神や佛においのりをせずともお守り下さると云ふ意なり　（凡夫であるから祈らねば又信仰もせねばならぬ）

○一偈を參ぜずして禪味あるものは禪敎の玄機を悟る

一偈とは一行の敎典のことなり禪味とは佛心のことなり一行のお經を知らずとも佛心則ち信仰の心ある人は佛の敎への奧義を悟り得ると云ふことなり誠にそうである信仰に這入る奧義は是れである佛敎の意義も亦此處に在り

〔どうぞ誠の信仰をして正しき信者にお成り下さい〕

大正十五年九月

爲政禿山述

大正十五年十月五日印刷
大正十五年十月十五日發行

施本【非賣品】

長崎市新大工町四十四番地
著者　爲政虎三

長崎市榎津町七番地
印刷者　藤木喜平

長崎市榎津町八番地
印刷所　藤木博英社

524
487

終